

## I 視察内容

### 1 大竹市立玖波中学校

#### (1) 小規模学校だからこそ、より強い「One Team」精神で取り組む様々な実践

玖波中は全校生徒 74 人で、本校の生徒数 67 人と比べてもほぼ同じ規模の学校だった。その中で、全校生徒・全教職員で取り組んでいる 2 つの実践があった。

##### ア 行事後の学年を越えたメッセージ交換

校舎内の壁には「感謝の木」や「お疲れ様メッセージ」など、温かい言葉で溢れていた。学年を越えてのやりとりが、より強い絆をつくっているのだと感じた。

##### イ 全校生徒が同じ歩調で行っている取組

「家庭学習の目標時間」として、各学年話し合った時間が掲示されていた。何気ない取り組みも、全校同歩調で進められていて、「全校生徒で考えて高みを目指す」という思いが伝わってきた。クラスだけでなく全校で取り組むことで学校力が上がるのだと思った。

#### (2) 小中連携して行っている資質能力レベル表の取組

資質能力レベル表は新学習指導要領につながっていて、教師側だけではなく、生徒にも目指すゴールを明らかにしているものだった。参観した授業では、最初の方で「今日の授業で目指す資質能力のレベル」を確認していた。各教室にこの表が掲示されているので、生徒自身もゴールを見失うことなく授業を進められていた。また、この表は中学校だけではなく小学校とも連携して行っていた。同一中学校区で何ができるか、これから考えていく必要がある。

### 2 廿日市市立阿品台東小学校・阿品台中学校区合同公開(自己肯定感・自己有用感を高める授業や取組)

#### (1) 授業中の声かけ(阿品台東小の授業公開から)

#### (2) マイスター制度とぴっかりカード(阿品台中学校の取組)

教師が生徒の頑張りを認める取り組みがマイスター制度である。ぴっかりカードは、教師だけでなく生徒自身が互いに仲間の良い所を認め合い、ぴっかりカードに書いて渡すという取り組みである。これはさっそく実践してみた。生徒の様子を見ていると、書いている時もメッセージをもらう時も終始笑顔であふれていた。更なるやる気につながっている生徒も多く見られた。もう少し取り組みやすく工夫したところで、他学年にも広めていきたい。

### 3 広島県教育委員会(「できていない部分」や「うまくいかなかったこと」を大切に)

達成率が高くて、達成していない部分に目を向けることや、うまくいかなかったことを共有することが次の授業につながるということを、わたし自身が率先して行動で示していきたい。

## II おわりに

ある程度の経験を積んでいる今、「守り」に入っている自分が正直いる。新たなことに挑戦するにはパワーが必要で、そのパワーを今回の研修でもらうことができた。ミドルリーダー研修に参加できたことをこれからの自分の自信につなげたい。そして、「教師をやっていて良かった」と、自分はもちろん若い先生に思ってもらえるように、わたし自身がミドルリーダーに『change』していきたい。

(塩山北中学校 広瀬奈見)

## I 視察内容

福井県は、山梨県と比べて人口・県土面積も同じ規模であり、小中学校の数・教員数もさほど変わらず、自然環境に恵まれた地域である。また、全国学力・学習状況調査の「生活習慣や学習環境等に関する調査（児童生徒質問紙）」において「今住んでいる地域の行事に参加していますか」「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」の結果でも、両県は全国平均を大幅に上回っている。さらに、福井県が教育先進県と言われる理由は、「毎日の宿題・毎日の運動・先生への信頼」が「当たり前のことを当たり前に行う風土」となって根付いてきた背景があり、そのことを家庭と学校と地域との共通認識とされてきた。

福井市立大東中学校の視察では、第1学年理科「身のまわりの現象（光の世界）」の授業を参観した。福井県の8～9割の中学校では、「縦持ち」授業（学年をまたいで教科を担当する制度）を実施し、教員同士の切磋琢磨や他学年の生徒理解と情報共有など「福井らしさ」の充実した教育活動が見られる。ベテランと若手教員との知識や経験の融合が「授業づくりもチーム」という視点が色濃く反映され、生徒の理解力も緻密に把握されていた。「縦持ち授業」の導入には、教材研究や授業の進捗に関わる緻密な情報交換と準備に時間を費やすなどの課題が伴う。しかし、チームで授業づくりを行う体制や若手教員を育てる点では効果的であるので、本県でも可能な部分から取り入れて、実践していきたいと感じた。

## II おわりに

今回、福井県での研修を終え、初めて県外の教育方針や学力向上の取り組む現状を触れることができ、大変に有意義な研修となった。それと同時に、自分自身の「やまなし教員育成指標」を見直し、連携・協働の意識のもと、改めて中堅として学校経営へ参画の必要性を感じた。具体的には、PDCAサイクルにもとづき、授業や学校生活のどの場面で、どのような力を生徒に身につけさせたいのかを熟慮した上で、学年間や同じ教科の教員と情報交換を密にしながら、研修で学んだことを実践していきたい。また、福井県の教育活動を参考にしながら、思考力・判断力・表現力等を育成するために「主体的・対話的で深い学び」をより理解し、教科等横断的な視点で教育課程を編成してカリキュラム・マネジメントを充実させたい。今後は、さらに率先して職場でのコミュニケーションの向上に努めたい。若手教員に「教える」という場面も必要であるが、若手教員の考えに耳を傾けて、「共に歩み、共に学び、チームで学校経営に参画していく」というポジションを大事にしていきたい。さらに、ミドルリーダーという立場で「連絡・相談・報告」を大事にしながら、様々な諸課題に対応できる力や危機管理能力を身に付けていきたい。

（山梨北中 武藤英紀）